〔大正十年四月二十二日第三種郵便物認可〕　昭和四年一月一日　磐城新聞　〔火曜日〕　第二千四百二十七號

（一日）

磐城新聞

休刊　大祭第一　第三日曜
定價　壹枚二錢、壹ケ月五十錢、郵税十錢
廣告料　一行平錢指定廿錢增
發行兼編輯印刷人　蓮沼龍輔
發行所　福島縣平町田町拾六　磐城新聞社　電話五六四番

謹賀新年

迎年の辭

乾坤一轉、曉霞山河に鬚鬣して春光天地に周く、吾人玆に昭和四年の歳首に立ちて、新日本の隆昌を壽ぐことを得、何の光榮か之れに如かん。

顧みれば、今上陛下、赫々たる厥威、赫々たる厥德、之れを仰げば日の如く之れを望めば雲の如く、寶算尚未だ少うして萬機を總攬あらせられ、百性昭明萬邦昭和、眞に昭和日本の前途郁々乎として新政恢弘の機運に際會せるの時に方り、昨秋を以て登極卽位の盛典を擧げ行はせられ、普く中外に向つて皇位の繼承を宣明せられ、剩へ二千萬民衆に對して優渥なる聖勅を下し給ひぬ。

此の千載一遇の盛事に逢ひ奉ることを得て、國民は只心踴りて抃舞禁ずる能はざりき。而して爾來僅かに四十有餘日、今又玆に光輝ある更生日本の新歳を迎ふ。あゝ誰か能く此至幸至福に歡喜せざるを得ん。

新帝登極後の第一新春、之れを是れ光輝ある更生日本の新歳と稱せずして、抑も何をか謂はん。

然り、昭和維新による更生の日本は、今や洋々たる龍德により、赫々たる帝暉の下に、一切の內憂外患を一掃し去りて、國運隆昌、國家躍進の第一歩を印せんとす。是れ豈に日本に生を享くる者の怡々然として自ら祝福せざるを得る處なからんや。

忠君愛國は實に我國民の傳統的民族精神たり、之れあるが爲めに明治日本の驀進的文化を贏得せること世人周知の如し、而して今や新帝登極の大儀により て、此特殊の民族精神は遽々然として高潮し、新帝海嶽の鴻恩に酬ゐ奉らんが爲め、億兆心を一にして奉公の忠忱を是れ盡さんことを冀ふや切なり、斯くの如くにして爰んぞ國家的大躍進の起らざられや。國運隆々として萬邦に倫を絕するに至るの大業成らざらんや。

あゝ更生日本の前路眞に大に祝福すべし。吾人只夫れ至忠至誠、奉公の實を擧ぐるに孜々たらんことを誓言し熱願して、而して今日の迎春元旦を祝賀せん哉。以て迎年の辭とす。

元旦

磐城新聞社同人

石城郡銀行組合

磐城炭礦株式會社

古河鑛業株式會社

入山採炭株式會社

大倉礦業無煙炭礦

福島炭鑛株式會社

代議士　木村清治

代議士　比佐昌平

縣會議員　山崎吉平　古川傳一　鈴木辰三郎

建國勞働自治會　入山採炭會社

立國勞働自力會　大倉無煙炭礦

千葉彦治

松本德一　平窪村

喪中ニ付年賀欠禮

四家又一　內郷村高坂

朗かに明けた石城の昭和四年

多難の昨年度と光明に充つる今年

朗らかに明けた新春の第一日衣紋を正して賀慶に廻る人々の道行く姿も流石にんびりとした一種特有な氣分を漂はして新春來を肯かせるに充分である、耳に付いてゐる不景氣聲も今日ばかりは忘れられた樣であるが極度のドン底に陷た昨年の

不景氣振りを顧みて

今年こそはと何人の面上にも一種の光明に充ちた色が浮んで見える、小名濱商港平小鐵道の工事繰り上げ、等縣下注目の焦點となつてゐる大問題も昨年末に解決を見たのを始め今年は磐城製絲が二百萬　巨資を擁して繰業を開始するから此の方面だけでも當地方に幾分の活氣を導く導火線となるものと觀られ更に平町だけでも郵、平郵便局、平町役場の改新築工事が實現第二小學校の新築工事、平警察署の

移轉等々

數年來見られなかつた新期事業が續々着手される樣になつて居り平町としては多年の懸案となつてゐる前記諸問題が片端から解決する事となる下眞に千載一遇とも言ふべき今年で不況の中に迎へた新春とは言へ喜色充ぎつてゐる事は當然であらうが翻つて昨年度の當地方は一月十四日に大暴風雨　草野村小學校　崩壊を皮切りとし三月十四日には平窪村に天然痘が發生若見時としては小名濱商港平町を始め郡下各方面が年の

書入時として當て込んでゐた四月にかけて平窪村、平町其の他全郡下全く天然痘騒で火の消へた樣な狀態を呈したが此れに加へて四月には平町新田町から腸チブスが發生して瞬く間に五十餘名　患者を出しなを始め湯本、內郷、磐崎等本郡中心地から相次いで

滅茶〳〵

となり二十三日には藤原の墓地大陷沒事件が發生十一月十九日に至るや磐銀と共に財界の双璧たりし平銀行が遂に休業を發表した等々當地方の昨年は全く惡病神に祟られ續けてゐた事が肯かれる

の惡疫發生し更らに翌五月二十三日には郡下全銀行が預金の支拂制限を行つて辛じて苦況に耐へ續け七、八九の三ケ月避暑客を當て込んでゐる小名濱、四倉等の海水浴場は變調な天候續きで此れまた大打擊を被り十月に至つては十一日の大暴風雨襲來で郡下農民汗の結晶とも言ふべき稻作や秋作蔬菜が

新春四日の早朝に平消防出初式

昭和第一年の春頭を吉例の梯子乘り

平消防組では新春四日早朝の天、豫報に就いて二十九から恒例による出初式を當日正午小名濱測候所の觀測大に擧行するとなつたが發表に依れば今年は新帝御即位第一年殊に目出度き新年を祝福する爲め平消防幹部は勿論組員は力瘤を入れて當日を待ちあぐんでゐるから久方ぶりの新春の中天に火龍たる壯觀と精練された梯子乘り放永技が演じられるにあろう

「目下の氣壓は七百五十三糎ですが此の氣壓の急激に上昇しない限り元日から三ケ日間位いの天候は順調だと豫想されますが三日以後の事は豫想出來得ません元日は快晴とまでは行かなくとも可成り好天候と想はれます」

心配ない元旦の天氣

小名濱測候所發表

お正月中に於ける本郡地方

笑ふ門

お正月寸話

笑ふ門には福來る、わけて正月は笑ふべし。話は下品だが笑ひの材料依つて件の如し

大鏡に「いと高やかに鳴る拾遺物語に「いと高く鳴らしてけり」とあり宇治拾遺物語に「いと高く鳴らしてけり」とあり依つて想像するに昔は放屁することを單になら

ずと言ふた形跡がある。

降つて風雅山人の放屁論「昔へつぴり男があつて興行を演じ大儲けをした」と又「難波の千種屋清右衛門と言ふ藥屋はへつぴり藥を賣つた所が千客萬來を忽ち巨萬の富を成した」とあるが此れ壓卷の秀逸奇想天外の名案である

更に降つて明治の頭の川柳には「据風呂のおなら背中にかけあがり」「屁をひり憚りに行く實婦人」「汝は何を笑ふと隱居の屁」などあるは實以て意味深長

に鍋の入浴やら屁に耐へた丸髷姿やら、炬燵の中で老眼鏡をかけて書見する老人やらの面目躍如、感慨無量なるものがある。

昭和四年の暦

月給取りの當り年

昭和四年の暦は既に東京天文臺で編纂され神宮部署から一般に發賣されるが今年の天文は格別めづらしい現象といつてはないがなほ一つ來年は月蝕が一度もない事だ天文臺では「殆ど毎年月蝕はあるものだけれども一度もないといつて別に珍現象ではない」と語るが兎も角さう滅山る例でない日蝕は五月九日で朝鮮成鏡北道の北部青森縣の北部北海道および樺太をぞく外は本邦到るところ見られるそれ蝕分が一番多いところは臺北の五分六厘少ないところが仙臺の六厘東京はこの日午後四時九、六分からかけはじめて蝕分一分五厘まで上り午後五時十一、八分に至り全く復圓するその他一般的に必要な來年の暦を一通り記して見ると

小寒一月六日大寒同二十日節分二月三日立春同四日彼岸は三月十八日で春分は同二十一日午前十一時三十五分八十八夜は五月二日からいろ〳〵な草花の種蒔きがはじめられるわけ立夏が五月六日入梅は六月十一日夏至は同二十二日午前七時一分七月八日小暑同二十日土用同二十三日が大暑で立秋は八月厄日二百十日は九月一日で彼岸は同二十日秋分が同二十三日午後九時五十三分立冬十一月八日冬至十二月二十二日の午後四時五十三分である次は月給取りの日蝕（日曜日と祭日の重なり日）はなほ一回十一月三日の明治節だけで二日連續休みは紀元節が土曜日四月二十九日天長節が月曜日秋季皇靈祭の九月二十三日がこれも月曜日で新嘗祭の十一月二十三日が土曜日といふ四回も連續休みが稻き今から大滿悅振りである

謹賀新年

磐城新聞社
蓮沼龍輔
坂本浩
田村參也
塙操
高岡貞一
會川孝太郎
若松芳子
志賀直保
室越鶴次郎
橋本清二郎
外一同

謹賀新年

安島重三郎
高岡唯一郎
山崎與三郎
諸橋守次
諸橋元三郎

植田水力電氣株式會社　社長　金成通

磐城水產工業株式會社　社長　小野晋平　支配人　福尾伊太郎

江名濱漁業組合　組合長　佐藤德太郎

小名濱漁業組合　組合長　立花雄七

漆畑元吉　福島縣平町

植田郵便局長　馬上守一

小名濱大敷網　社長　郡司二郎

眼鏡、蓄音器、レコード　會田時計店　店主　會田右京　平町四丁目　電話三六三番

帝キネマ館　有聲座　館員一同　電話四四六番

大蒲燒　松本樓　平町南町　電話百十三番

海水浴旅館　錦盛館　小名濱港　電話四番

劇場磐城座　座主　鈴木シナ　磐城小名濱港

高級旅館　新米　小名濱港　電話八番

旅館料理　山田屋　植田町　電話八番

活版　松竹館　館主　松田卯次郎　會計　鈴木彌次郎　電話四六六番

各學校御用　新形自製靴　運動具類　大塚支店　平町田町　電話七〇二番

植田物產株式會社　支配人　山崎登

赤津庄兵衛　石城郡勿來町

小名濱商事株式會社　社長　小野晋平　專務　小野務平

磐城海岸軌道株式會社　社長　中野浩忠　支配人　丹野寛平

小名濱消防組　組頭　小濱長太郎

土木請負　强口唯七郎　好間村關ノ上　電話四〇一番

吉田正雄　石城郡江名町

七十七銀行平支店　支店長　山田勇太郎　副支店長　三浦幸哉　外一同

中野浩忠

伊東一　平町驛前

磐城　共濟病院事務所　平町元郡役所前

關內油店　店主　關內正一　平町二丁目　電十六番

平町三丁目　三井昊服店　電話三八番

和洋紙　諸文房具帳簿　坂本紙店　平町一丁目　電十八番

平町仲町　二葉舍印刷所　平町　電話七三四番

材木商　佐藤三平　內郷村小島　電話三二二番

石城郡江名町　ヤマト醬油株式會社　專務　遠藤俊一郎

實川產婦人科醫院　院長　實川彌太郎

高久病院　院長　高久忠

市原病院　院長　市原卯太郎

安齋外科醫院　院長　安齋徹

上田外科病院　院長　上田耕作

合資會社　磐城通信社　社長　小野務平　支配人　星敏夫

平陽舍　吉田新聞店　吉田禮次郎　吉田喜代治

平局の年賀郵便 三十萬を突破

東北第三位の豪勢 去年より六割増

平郵便局は去る廿日の年賀状特別扱開始以來連日押せる年賀状の洪水にまるで戦場のやうな繁忙に田村局長以下汗だくの活動を續けてゐるが取扱の最終日たる廿九日の午前六時から正午までの六時間中に驚く莫れ十萬五千餘の年賀状が津浪のやうに襲來し局長を呆然たらしめてゐるが廿九日一日中に約二十萬通の引受拒すと此の年賀状と小包のあるものと豫想されてゐる尚取扱開始以來の引受數は廿日三千六百、廿一日六千六百、廿二日六千三百、廿三日五千三百、廿四日九千二百、廿五日は一躍五萬二千廿六日二萬三千、廿七日二萬六千三百、廿八日五萬三千、合計す八萬六千通前年に比較して約六割の増加此の成績は東北七縣中仙臺新潟の兩市に次いで第三位更らに年末の増答小包の加きも前年の約七割増加「不景氣、とんでもない！」と局員は鼻息が荒い

正月は油斷から怪我を注意せよ

心得おくべき應急手當 宴會歸りの危險

正月は兎角ゆるみがちなる爲め思はぬ不用心をすることがあり、それらの場合に心得おくべき應急手當を申上げ度い、先づ怪我やの爲め卒倒したやうな場所が新年宴會場等で醫者が招くに間に合はぬ時は直ぐ怪我した所を過酸化水素液洗つてから壓迫繃帶をする事であり、醫者を待つ、吐血、尿血、便血、腹膜内出血等の場合は安靜を守り、局所が分かつたら其部分に氷嚢をあてしる事であり、醫者を待つ、鼻出血の場合は鼻腔に綿栓をし、床に仰臥させ安靜を保たせる、喀血、肺血の時は絶對安靜を保ち饒舌を禁じ食鹽水をのませ、胸部に氷嚢をあてしる事、そして醫者を待つ、吐血、尿血、便血、腹膜内出血等の場合は安靜を守り、局所が分かつたら其部分に氷嚢をあてしる事であり、醫者を出來上がる迄、

燒印の賀状

陶印の新し試み

殊に御大典の後に來る新春の賀狀には、色々の風變りな印刻が流行り出しました、その中でも燒印といふ風趣豊かな陶印が趣味家に喜ばれてゐますこの印の土の質はマジョリカ樂燒との合の子の樣なもので、大體樂燒と同じく各方面の異なつた土を集めたものです、土を印刻の形にしそこへ好きな祝賀の字を彫刻し、乾かしてから藥をかけ、それを釜の炭火で一時間半ばかり燒けばそれで出來上がる訳です、朱印で印紙の塗藥書を無駄にすることがあります、押すならば私製に薄つすらと押せばいゝのです、こげ茶の中に風變りな雅味を漂はします。

賀狀に印刻を用ふることは、一寸すたれ氣味でしたが去年あたりから、又猛烈な勢ひで盛りかへし

正月の門松は 長壽不老の表徴

軒並の門松の立ちならぶました松は枯れるを知らない常緑の樹で、昔からた芽出度いものゝ表象とされてをります、松の字が木扁に公と書かれたのは百木の長寿であるからだと言はれ、霜雪にもびくともしない所貞心になぞらへられて貞木と稱せられてゐます、門松が我國で正月に飾られるやうになつたのは延久、承保の頃から竹の上に添へられ出したのだ、此の風習は初めは民間の町家から起つたのですが、德川時代には將軍家を始め武家町家一般に年賀頭の

緣起

りましたが、さてこの門松風習は隣邦支那各地にも昔からあり、殊に吉林の松花江沿岸、南方楊子江沿岸を舊暦の支那正月の

不老

の術だとて、この門松の葉を髮飾りにします、遠く滿洲蒙古地方にも門松の風習はあります

松

は此の如く長壽不老を表徴した生氣横溢の樹として尊ばれますが松から出る松脂は支那では動物に於ける血液の如くに考へられてゐ化石沿岸、南方楊子江沿岸、お正月の如く道士の中には長生不老の術だとて、この門松の葉を髮飾りにします、遠く滿洲蒙古地方にも門松の風習はあります

松の梢

に遊んでゐるやうに描かれてゐます、支那で松柏が多く墓地に植られてゐるのは、その長久青翠さが地下に眠る人を護ると云ふこゝろから出たものと思はれます、また我國に於いて進物に松の葉を書くのは、支那の本物の松の葉を贈り物に付ける事に習つたこゝろ樣です

家内の所々に飾ります

楊子江邊

では船や筏の上にも松と竹とを組合せて飾りがつけられてゐるのを見ます、また婦人はお正月の松の葉を髮飾りにします、遠く滿洲蒙古地方にも門松の風習はあります

松は此

如く長壽不老を表徴した生氣横溢の樹として尊ばれますが松から出る松脂は支那では動物に於ける血液の如くに考へられてゐ化石沿岸、南方楊子江沿岸を舊暦の支那正月の如く道士の中には長生不老の術だとて、この門松の葉を髮飾りにします、遠く滿洲蒙古地方にも門松の風習はあります

松の梢

に遊んでゐるやうに描かれてゐます、支那で松柏が多く墓地に植られてゐるのは、その長久青翠さが地下に眠る人を護ると云ふこゝろから出たものと思はれます、また我國に於いて進物に松の葉を書くのは、支那の本物の松の葉を贈り物に付ける事に習つたこゝろ樣です

喰つて

歯から落ちず白髮にもならず、百七十歳までも生き延びたと言はれてをります、長命の神である壽星の繪はいつも松の樹の下に立つてゐる形に描かれてゐ、仙鶴の繪は常に

松の梢

に遊んでゐるやうに描かれてゐます、支那で松柏が多く墓地に植られてゐるのは、その長久青翠さが地下に眠る人を護ると云ふこゝろから出たものと思はれます、また我國に於いて進物に松の葉を書くのは、支那の本物の松の葉を贈り物に付ける事に習つたこゝろ樣です

待つ事然り、餅の食べ過ぎには大根にろしを澤山召上がる事

一日醉の

ひどい時は重曹一さじを冷水で服用すればさっぱりする、腦溢血、即ち卒中で倒れた時は頭部を高くして安靜にさせ頭に氷嚢をあて足部に湯タンポを入れる、そして至急醫者を招く、カルタ會の時などよく起る腦貧血には衣服を脱がせ、頭部を低くして安臥させ、顔面に冷水をかけ胸部に芥子泥を貼るそして葡萄酒がブランデー、ウヰスキー等を小量與へるとよい

俳句

勅題『田家朝』

小川郷　吉岡獨歩

炊煙や十戸の村のお元日
のつどさす蕎麦の軒や初日影
裸木の梢から出たり初日影
初鶏や東西呼應して明けんとす
初空や平和漲る朝煙り
初東風や家飛び〳〵に日の御旗

和歌

たほけなき伏屋の朝の煙りこそ
豊けき御代の兆なりけり
年毎に稜威洽ねき民の戸に太しく上る朝煙り哉
遂生の軒に掲げし御旗も
稜威輝く朝ぼらけ哉
知ろし召す民安かれと天皇の
見そなはすらん朝煙り哉

東部電力平營業所　所長　武田精一
平料理屋組合　小田吉治
高橋龜松
平町長　伏見彦衛
平町助役　佐藤要四郎
いはらき平支局　柏木哲
福島民報平支局　山田磐磨
平藝妓屋組合
平看護婦會　會長　清野キヨ　平町南町電三〇七
加藤丈夫
三井自動車部　三井富吉
平町西洋料理業組合
平町公私立學校長懇話會
尾形治右工門

平町醫師聯合
矢吹醫院　矢吹大輔　電話二六六番
鈴木眼科醫院　鈴木亮　電話四三八番
吉田眼科醫院　吉田安雄　電話六八番
大和田耳鼻科醫院　大和田郡司　電話一七〇番
松村病院　松村鐵郎　電話一〇七番
星眼科醫院　星恒明　電話四七一番
藤沼醫院　藤沼半次郎　電話五〇七番
大森醫院　大森勇　電話二五八番
酒井醫院　酒井國三郎　電話五五番
金成醫院　金成忠義　電話三五八番
赤心堂病院　新妻由郎　電話四七五番
御料理　一の井　平町　宇田町　電話一六七番
造花製造販賣　博盛堂　平町搔槌小路　電話七五八番

鈴木片濱自動車部　電話二一七番
石城郡第三區小學校長會
喪中ニ付年末年始ノ禮ヲ欠ク　阿部政右工門　平町五丁目
釜屋　諸橋久太郎　電話九番
土木建築請負業　堀江工業株式會社　社長　江口忠一　支配人　鈴木唯治
石城水産會副會長　江名町會議員　江名郵便局長　中田政吉
高久村役場　村長　鈴木喜太郎　助役　本馬武　收入役　箱崎豊　書記　猪狩千代司　藥剤師　谷明
於石城酒造品評會優等賞受領　銘酒純良　小錦本舗　石城郡高久村　鈴木喜太郎
土木建築請負業　中山吉之助　事務所　石城郡川部村　出張所　植田町本通り
小名濱町役場　町長　鈴木榮　助役　高木保　收入役　樋口遠
中村醫院　中村三郎　磐城小名濱町
岡本義兵衛　茨城縣土浦町

夏井村消防組　組頭　矢吹豊
石城郡豊間村　銘酒　豊仙馬目仙十郎　電話九番
平町南町　鈴木齒科醫院　院長　鈴木五郎
多田井質店　多田井笑次郎　平町大工町
植田藝妓屋組合
石城郡第一區學校長
中島眞寫館　中島孟　平町田町
日東商會　長島菊苗
小田炭礦株式會社　社長　萩原申八
河北新報平支局　横山顯
常磐線湯本町　旅館御料理　松柏館　電話五番
喪中ニ付年末年始欠禮　旅館料理　山形屋　湯本町　電四番
いわき屋旅館　いわき自動車部　平驛前新道通り角　電話七五九番
好間村役場　村長　金成淺治

賀正

海産物鮮魚商
大堀魚店
磐城平町二丁目
電二一七五番

猪狩菊三郎
磐城平町田町
電話四七三番

平町三丁目
三井履物店
電話一五六番

蒲鉾商
藤市
平町三丁目
電三〇五番

鳥料理
初音
平町新田町川岸
電話二三六番

平町二丁目
清光堂
關内彦太郎
電一三一番

御料理
天ぷら
越の家
電三三〇番

家具漆器
簞笥
雑貨
丸はん
磐城平町三丁目
電話三五九番

平消防組
井上茂作　石坂詮太郎　柏原幸次郎　鈴木長三郎　諸橋守次　岡田政次郎　鈴木彌太郎　高野得助　三井富吉　關内正一
酒井清　高根澤長太郎　涌井彙作　根本幸次郎　田中宣治　佐川三郎　安藤初吉　岡部治作　高木福太郎　金成泉一郎

四倉銀行會社組合
磐城セメント四倉工業所
四倉合同運送株式會社
株式會社四倉銀行
四倉電氣株式會社

須藤德雄
好間村町田

皇國報恩會
小松洋服店
平町字才槌小路

鰻そば
平町字田町　電話四番

山野邊藥局
山野邊東次郎
平町字五丁目

平町字仲田町
現物
仲買
マルト株式店
駒塲四郎
電話四六五番

工榮商會
佐々木健一郎

喪中ニ付年末年始ノ禮ヲ欠ク
山田忠太郎
平町三丁目

尼子自動車部
平町二丁目　電六四〇

劇場
聚樂館
飯田一二
電話四七〇番

割烹
大貞
平町田町
電四二三番

辯護士
菊池儉輔
事務員
渡邊十太郎
平町字田町
電話三四五番

平町旅館組合

平町新川町
佐藤材木店
佐藤藤助
電話三三五番

石油、水油、砂糖
小麥粉
百澤商店
平町四丁目
電話十二番

平サービス
ステーション
磐城國平町驛前
電話六一一番

關内藥店
關内榮助
平町四丁目
電四〇番

スズラン撞球塲
織田榮三郎
平町字南町

マルト撞球塲
野木次郎
平町仲田町　電四六五

平町會議員一同

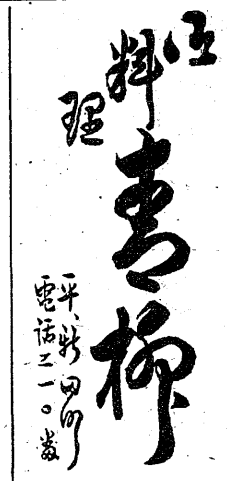
三二三屋肉店
平町里町　電三二三番

寶來亭
平町新田町　電話三二五

家具建具
製造販賣
片寄家具店
片寄小彌太
平町五町目

西洋料理
丸昇軒食堂
平町南町　電四三九番

荒物雑貨商
大一屋商店
平町二丁目　電話十三番



磐城建物株式會社

平砂糖商同業組合

平町南町五〇番地
磐城殖産合同株式會社
電話四六番

大黒屋商店
平町三丁目
電一一六番

大村屋旅館
大村一郎
電話一七五番

酒銘
近盛
馬目支店
電話二五四番

鐵道省御指定
御料理
旅館
尼子亭
平町松ヶ岡公園
電二三〇番

二本松電氣
平營業所

西洋御料理
三益
平町新田町
電三二一番

佐川洋服店
平町三丁目
電四一八番

吉田髮結所
吉田みさを
平町字新田町

松本木炭店
磐城國平驛前
電話六三九番

御料理
玉よし
電話四二六番

銘酒
由良の助
平町四丁目停車場通
電話二〇七番

マントンピ　オーバ
セビロ　コート　の早賣り
安賣り
正札堂洋服店
電話二三四番

阿部材木店
平町紺屋町
電話八四〇番

平町土橋
精米穀
精米類
醸造
馬目玉彌
電話一〇一番

平材木商業組合

磐城郡小南町
鈴木染工塲
電話八三八番

平町四丁目
松本菓子問屋
電話二一四番

鰹節蒲鉾折詰
藤寅
平町一丁目
電話一四一番

銘酒
白菊
廣瀬支店
平町字田町
電話四五番

ベニヤ小鳥店
白土喜伯
平町字田町

石城
産科婦
看護婦
學校
校主　鷹崎貞衛
校長　鷹崎千代

平三業保健組合

平製氷株式會社
專務取締役加納五郎

有限
責任
平町信用組合
組合長　大谷久藏

大谷時計病院
平町三丁目　電十九

朝湯、人參實母散湯
梅之湯
增子富次
平町字田町

高野分店
高野卯之吉
平町字田町

磐城平鎌田町
印伴天
其他
草野染工塲
電話三四八番

木材石油香油
各種油販賣
櫛田榮太郎
平町材木町八番地
電話二四八番

ハシモトヤ糸店
平町　藤田女學校前

電機
機械
磐城工業商會
中村佐治助
平四丁目　電二一八番

大床
石崎幸一
平町田町　電七二九番

なかや洋服店
平町二丁目　電二〇三番